

先進繡像玉石雜誌

仁

續

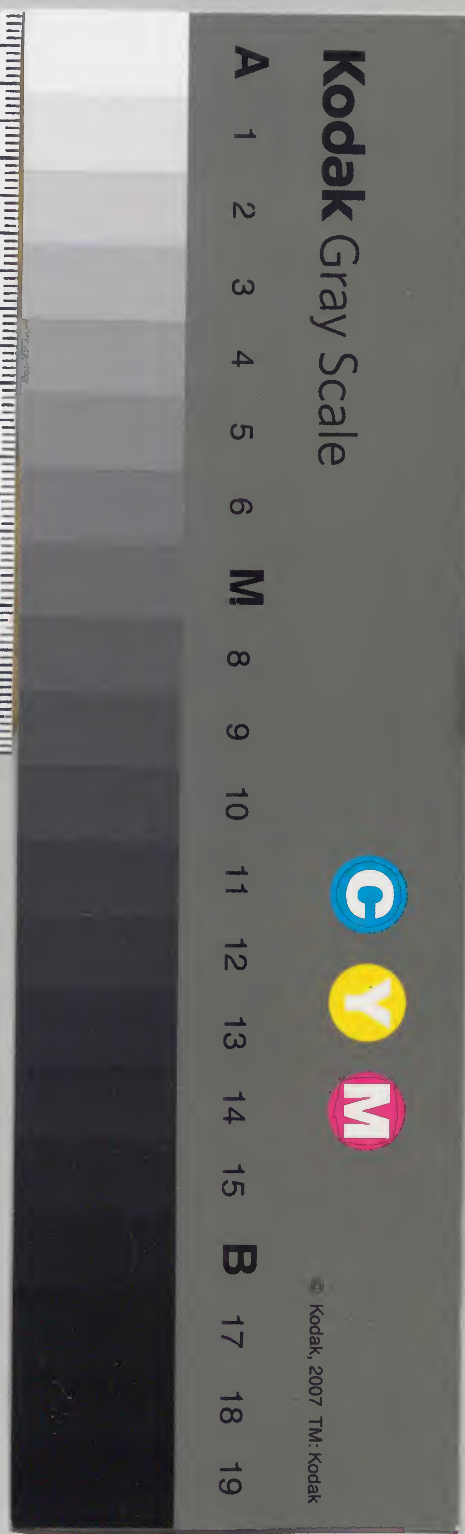
					和書門
			一六〇		
		二二九	二四		
二〇	二一	二二	二三	二四	
冊	架	函	號	類	

				內閣文庫
			六〇	和書
		二二	二四	
二〇	二一	二二	二三	
架	冊	號	類	

史傳載

史傳載

內閣文庫		
番號	和	16024
冊數	20 (11)
函號	158	211



柳菴栗原氏編

先進
玉石雜誌 三編
繡像

東都書林 知新堂發兌

先進繡像玉石雜誌續篇卷第一目錄

淺草文庫

山本勘助晴幸真像二楨

軍配團扇 葛井寺合戰地理天時相應圖

破軍星操法 孤虛 高旗 鷲旗 城取

稻城 鎮兵糧料 大和國年城宮經營細圖

唐天興城經營細圖 安藝柵守氏 貫高

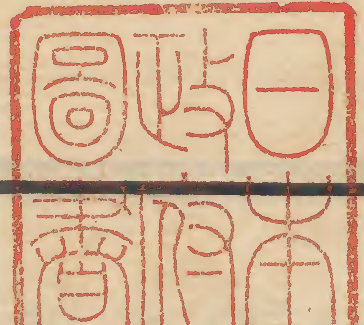
補を疊法 大内義興卿 周防山口風俗

上下 前九年後三年合戦乃評 後三年合戦

繪筆者 下妻乃多賀谷氏 上杉乃老長

牛久保 武田信虎一族を滅せし事 落照露

言抄 京流劍術 鬼一法眼 神道流



晴信朝臣元服 崎一字 卒始乃式

武田と野分信友 並崎合戦 葛木合戦

河領百貫 長合升 知行 一騎元

采黨 足輕 小回井城 諏訪頼茂

口陣列 潮尻合戦 戸石合戦 巖虚

孫子又事 周書七制 編陣 上田原合戦

海野平合戦 鶴翼陣 一万又子母七備

謙信信玄を論せ 満寵 潮尻嶺合戦の二

上校武田の家格 上列陣 青竹の柄采幣

刹那 烽火法 火益和尙 晴幸薙髮

景虎の本卦 時回陣 間牒 一座一起

玉續一ノ目ノ一

甲冑着初乃式 八幡太郎義家鎧着用乃次第

城取繩張 岩回道准流乃城取 海津城乃古

圖 人數備築城 弁形又七 赤砂地

百雜 周代徳彦持城乃法量 吳子胥乃城取

亞字形 ちぎり乃曲尺 陽乃矩 陰乃矩

口奇口凶乃陣 八陣 道鬼改口八陣

車懸 須崎堀内乃記 孫武吳起乃論

先進補像玉不雜誌續篇卷第一目錄終

其聖德太子天皇御宇...

Handwritten text in vertical columns, likely a transcription or commentary related to the portrait on the opposite page.

王續一ノ目二

山本勘助晴幸真像

或家藏

一書不河邊大長魚糸云
乃子孫ありと云ハ信也



信北繪

關氏所藏廿四將像所載



信元云前像と左右眼相違あり孰是かを知らざらん

信元摸寫

玉續一ノ一

軍配團扇

山本晴幸所製



團扇立八寸 横上六寸九寸 中六寸七分 下六寸七分二分

柄ハ勝軍木 又ハ弓乃 長一尺九寸 五分 上乃出三分 下乃出二寸二分

結あり下三寸五分 結あり上三寸五分

緒通乃充長サ四分 宛あり下五分

緒ハ紅紺紫よハハ崩黄・長ハ

團扇乃三三ハハを用小此うちハ 乃緒二尺八寸あり

練皮二枚合を朱漆黒漆

七星ハ金入り畫

山本勘助晴幸入道道鬼々明應二年癸丑八月八日近江國
神崎郡山本村了生家 山本村ハ越知川岸乃轄 近江源氏
山本九郎時綱乃末葉と云里永正十年七月九日仇々
本近江守氏綱卒し家を續へる子あり國人氏綱乃弟
吉侍者し相國寺ハ喝食乃體み居たふを還俗せし
世氏綱乃遺跡とし定頼と改め京都ハ出仕し後位下
ハ叙し彈正少弼ハ任せ其家督ハ初國中乃政事も極
老長等ハ周旋了依と云とハ氏綱ハ條目了違入と多
又江北乃仇々本京極高清入道と上扱泰貞齋ハ軍務を擅
せ失里し小後井新三郎亮政も上扱子共を討し京極乃
家を進退せんとするを見し角くハ近江乃國ハ主弱く後

至續一ノ二

強儲を教乃ふく弓箭乃光輝を天下了露を以殺乃大
將を出すも形ハ我家貧賤夫里と云とハ兵士乃藉を汚
身亦里能大將了隨ハ涯分乃運を試を希と決定し
永正十年九月下旬生年廿六歳心細くハ只獨近江國
を立出く先京都ハ赴き北山邊乃知己を便里等持院の
長老了身を寄し將軍家乃奉公を望し薪水を給事せ
と老實亦里けは長老の意了叶ハ寺中乃諸務を管轄
西三年ハ成了け里 已上ハ山本氏系譜及ハ山本村里人ハ
然る了將軍義植卿乃大永元年二月七日竊ハ御所を御
出ありし泉列塙乃南庄ハ隱御座けあり爰ハ都近く
悪り里ぬ登しとく同月十日淡路島へ移らせりハ後ハ

河波國振東郡撫養島不在其の管領細川政元乃家督
高國澄之澄元と分也大里一澄之澄元不殺也澄元
高國を斃さんと数年乃合戦了退屈せ勢入る故と
之同之助助大了望を失ひ熟思やう新將軍義晴卿ハ
幼雅不在萬事高國管領せと云共其身驕奢入る
弓箭乃穿鑿不疎一洪業を興せんと大将乃器不あり以
去ハ折營奉公乃念を翻一智勇兼備乃良將不値遇せと
やと先中國を志一寺持院乃長老不暇を請一ハ長老
其志を哀れ馬乃驢心を盡一と云云大里助助も二
年四年馴入一都の名殘惜も也と大内入る三續く雙乃
岡乃松枝も今日を限と見返せハ息入るハ鞍馬ハ次第

手續二ノ三

志ぐひ小遠く隔大里櫻井宿入夜を明一朝霧乃晴向よ
里雲間了高く聳ゆ教も昔元弘乃初の歳後醍醐天皇乃
勅定も依楠多門兵衛正成乃城郭を搦大里一葛城や全
剛入乃奉續も辛早乃嶽を見も一と云出や本朝も武勇
乃譽世の身を轟かき一人多しと云と楠正成も乃
大将も如く正行正儀赤と乃如き子孫もあふや我今
奉公乃勤も亦く暱近乃主も亦一後乃才覺了あさん為
河内國了赴も楠乃舊蹟を一覽せもやと思ひ是より
路を替葛葉乃渡を打渡一交野飯盛就島の尾や平岡過く
大和川葛井寺も立寄る正平二年八月十六日楠帶刀正
行精兵もつかぬ之百騎を以る細川隆奥守顯氏乃三千餘

騎を責破里たふ舊蹟を巡覽とく孟子乃好謂天時及地
理了如之地理人知了如之云云之誤也家正を知里
とかや葛井寺舊蹟了大永二年山本勘介云云云云
勘介乃孫の頃なりと云大永二
山本勘介晴幸五戦書に決小寡戦と云及小勢を以て
大勢を撃を云楠正行葛井寺合戦乃如き是如里此合
戦云正平二年八月十六日乃事あり但細川陸奥守顯
氏を八月十四日午刻に葛井寺に著大里此時破軍の
己方小當る住吉天王寺中島邊を葛井寺より亥方小
當るに楠正行を背あしと虚を討乃天時を得大里と
云川原と見也今是を詳ふを教了正平二年の正成

郷討死ありけり延元元年より十二年小當る正行も
廿五歳乃秋を迎明年の父より十三年乃祥忌あり供佛
施僧乃作善心乃如くせんまゝ一人ありと云京勢小
駈向ひ敵を亡く至上乃宸襟を休し亡父乃幽魂を慰
めとやとく其勢五百餘騎を卒し住吉天王寺邊へ打
出中島の在家少く焼拂入る京勢や掛分と待掛たり
正行乃岸城を河内國赤松郡赤坂あり今乃將軍尊氏
陣前住吉天王寺中島乃が位を下り圖せよ細川陸奥守顯
是を同多し急ぎ馳向く退治せよと云
氏を大将とく云都宮之河入道依々本六角判官長
左衛門尉松田次郎左衛門尉赤松信濃守範資后舍弟
筑前守範貞村田奈良勝坂西坂東菅家乃一族共了都

合三子餘騎河内國へ差下り候。此勢八月十四日午刻
小葛井寺へ移着たりけり。此陣より楠ヶ館へは七里
を隔たは急ぎ寄ると申。明日も明後日も乃間り
寄らんとせらんと。京都油断し候。或は物具を解き休息
し。或は馬鞍を下りし。休息所了。譽田八幡宮乃後家
山陰了菊水乃旗一流に乃見え候。混甲乃兵七百餘騎
閑々と馬を歩せし。打寄たり。是を敵乃寄たり。馬
小鞍をけ物具せよと。ひし先を色めく所へ。正行先
日進み喚て懸入。大将細川陸奥守顯氏鎧を反肩に掛
たせし。未上帯をよ去免得。大刀を帯へし。隙に
見届け。家間村田乃一族六騎小具足計り。誰が馬

と申。形く混々し。打乗し。雲霞乃如く。群々。振た。敵乃
中へ懸入し。火を散らし。戦入たり。然と申。續く。味方
かを色め。火勢乃中り。取巻ら。村田乃一族六騎。二
所あり。討せり。けり。其間。大将の物具。堅め。馬了。打乗
り。相後。人兵。百餘騎。暫く。支り。戦ふ。里。楠ヶ。小勢。か。里
京方。火勢。か。里。掛合。乃。軍了。負へ。り。援。か。か。里。ける。み
諸國。乃。駈。武者。前。不。支。り。戦。は。後。不。だ。捨。鞭。打。り。引。け
家間。楠。い。よ。し。勝。り。乃。里。連。擲。去。る。は。大将。由。天。王。寺。渡
邊。乃。急。不。り。殆。く。危。く。見。へ。ひ。せ。り。六角。判。官。兄。弟。逃。し
合。せ。り。討。死。せ。り。此。等。不。支。り。せ。り。擲。せ。り。ま。く。連。せ。り。け。り。は
顯。氏。由。士。率。由。危。命。を。助。け。り。と。京。へ。逃。返。り。と

太平記見へたり。晴幸乃五戰書依ハ楠氏乃陣ハ
住吉文王寺中島邊と云々。太平記乃就々考入也。及楠
氏未坂より寺打出。藤田山乃後より葛井寺を設ハ細
川顯氏天正寺を經ハ渡邊橋を京ハ逃上家と知魚！
破軍乃操様乃事林廣記ハ甲子日ヨ里癸酉日ヨ十日
乃際成亥ヨ里辰巳了向人魚！甲戌日ヨ里癸未日
ヨ十日乃際成申酉ヨ里寅卯向人魚！甲申日ヨ里
癸巳日ヨ十日乃際成午未ヨ里子丑了向人魚！甲午
日ヨ里癸卯日ヨ十日乃際成辰巳ヨ里戌亥向人へし
甲辰日ヨ里癸丑日ヨ十日乃際成寅卯ヨ里申酉向
人魚！甲寅日ヨ里癸亥日ヨ十日乃際成子丑ヨ里午

未小向人魚！と見也。秘是は正平二年八月十六日
長曆を以テ推ハ丙戌日ヨ里即甲申ヨ里第之日了尚
る午未ヨ里子丑了向人魚。如里赤坂館ヨ里葛井寺
乃子方身當る。即成了坐去。虚了向人と云へ。五戰書
ハ八月十日午刻破軍已方不當ると云ハ北斗七星の
第七破軍星一ハ標老と云。孔子元辰短了天洞星と云。
指と云。乃指ハを云。其旋轉様々安家乃青標紙子
時日除く月乃數と云。里八月乃午刻成也。は午一未
二申三酉四と云。除成月亥二月子月丑月辰月巳月
己月ハと旋を云。但孤虚と云。史記龜策傳ハ日夜全ハ
らと故不孤虚ありと云。是亦里日とは甲乙丙丁乃十

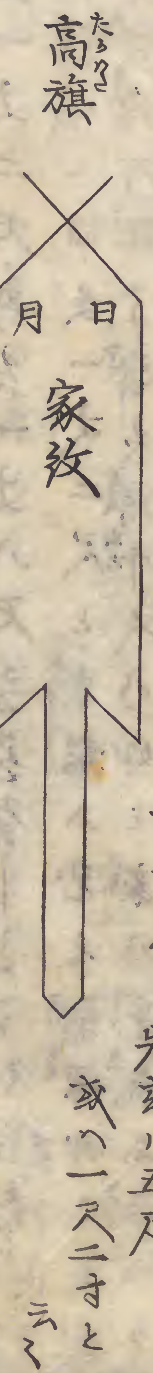
幹を云辰と成子丑寅卯乃十二枝を云十幹十二枝を
配合し申子丑寅卯辰巳未申酉戌亥乃十二枝を云
癸酉と旋一戌亥乃二枝了幹を依る孤と云戌亥の
衝を辰巳未申酉戌亥と云とあり甲戌を孤と云
を虚と云甲申酉戌亥乃旋了午未を孤と云丑を虚
と云甲午未乃旋了辰巳を孤と云戌亥を虚と云甲
寅卯辰乃旋了子丑を孤と云午未を虚と云甲
義不支孤不乃干か一故了空亡と云亡と云及無
干無了故か里衝人否全く虚一故子空と云とあり
孤虚と空亡と同一論か一是を兵機了用ひしと
ハ伍子胥り遼甲孤虚記遼甲孤虚注斗中孤虚圖黄帝
兵法孤虚推記葛洪兵法孤虚月時秘要法かと經藉志

不見るる家あく知魚一皇朝あく去吉備公乃孤虚毎
月圖大江匡衡乃孤虚月時法かと著述ありと云と
是を合戦不用ひら也一とを関と保元元年後河院
と崇徳院乃御國争々七月十一日寅乃刻か里破軍ハ
乃方小向小後河院乃御所東之條教よ里崇徳院乃
御所向河乃北殿乃方小當也ハ已乃時を待也か
ハ破軍外乃方小向ハ一独る了寅乃刻小軍を向ら
也一乃孤虚を用ひ云とぬ證と云へ一治承四年八月十
七日前夜兵衛佐頼朝卿ハ本判官兼隆を誅する了寅
亥刻と定めら也一と形也一八月十七日寅外刻ハ破軍
丑寅乃方小向ハ里頼朝卿乃北条乃館よ里山本乃館

乙丑寅了當れ星是後原邦道と佐伯昌助と兩人一々
 勳進せし處と云々要孤虚不依一か不登一同月廿二
 日寅刻衣橋山乃陣せしは亦孤虚乃時を用ら敷
 八月寅刻山乃破軍丑了故人北此之ハ皇朝不々孤虚
 氣よ星不橋山乃丑了當に皇を軍務了推准せしと頼朝卿不中興一楠氏了修補一
 晴幸了大坂せしと知屋一
 晴幸既了葛井寺乃古戰場を見く楠氏乃軍法去備公及
 ひ大江匡衡後原邦通佐伯昌助等乃傳不出く遠くハ異
 朝乃將所乃胸蘊不發一近くハ奕世乃先賢授受を重く
 せしとを嗟歎一猶楠氏乃舊蹟を巡覽せんら為不暫
 爰不寓宿を借んを寺僧不計る寺僧ハ亦晴幸了形容

玉續一ノ九

醜一と云共詞理約やの不辨舌明らるかを奇と一々
 寺中不止宿せしや且楠氏乃故を語里其遺せ不兵器を
 出く示さ晴幸了了了於く團扇采牌鞭扇子母衣旗
 幕内幕持楯押之鼓螺貝等乃故實を知一を得た星とを
 旌旗作法八箇条 興書了大永之年正月日於河内國葛
 即之十一不云旗乃圖 井寺寫得之畢山本神助晴幸了とある
 歳の時也



昔乃旗を吹流たる里あり 信元云爰了高旗と云は日初
 郡大領沙尼具那了鱗旗二十頭を賜人とある鱗旗不
 也一釋日本紀云懷賢乃釋日本紀作里一時を云
 懷賢ハ後嵯峨後深草兩朝乃人と云ハ其頃を攝籙旗

と称たりし。後不高旗と云ふらん。不鬼乃不人。紙爲を
今小たりと。呼る國ある不。知へ。但軍器考不。八籍
旗乃制詳不。知難。一とある。今ハ晴幸乃書不。依。千百
八十六年前乃。器を。知。正を得。夫。又按不。阿。礼。幡。と云
旗。内。裏。式。不。見。也。或。高。今乃旗。之。幅。或。之。二。幅。半。二。幅
旗。一。丈。二。尺。或。之。一。丈。八。尺。亦。分。一。と云く
旗。素。帛。二。幅。長。一。丈。二。尺。と。東。鑑。不。見。名。體。源。抄。不。及。義
貞。朝。及。乃。記。了。旗。之。縮。布。入。乃。好。之。家。乃。先。規。不。依。へ。そ
り。長。ハ。八。尺。或。ハ。一。丈。又。ハ。一。丈。餘。神。乃。御。名。思。ハ。以。以
又。家。乃。後。之。の。里。ハ。一。丈。又。ハ。一。丈。餘。神。乃。御。名。思。ハ。以。以
服。と。云。又。ハ。五。丈。乃。練。貫。を。一。尺。之。寸。切。之。笠。在。と。云
去。其。餘。を。旗。了。裁。へ。一。逢。夫。一。丈。二。尺。亦。里。と。云。思。也
旗。作。法。文。録。け。是。ハ。是。を。累。也。大。永。之
年。晴。幸。葛。井。寺。入。住。せ。し。一。を。證。ま。る。の。之
晴。幸。葛。井。寺。僧。を。御。導。と。し。石。川。郡。金。剛。公。轉。法。輪。寺。寂
上。乘。院。小。昇。里。千。早。城。趾。を。巡。覽。志。く。城。取。了。六。乃。地。形。有
ま。と。を。依。し。此。地。を。繁。昌。地。乃。小。本。と。思。定。し。と。去。里。葛。井
寺。ハ

王續一ノ十

丹南郡不。あり。紫雲山。云。寶院。と云。真言宗。聖武天皇。御。願
心。行。基。菩薩。開。阿。保。親。王。乃。中。興。金。剛。金。峯。兩。山。乃
乃。西。門。と云
山。本。道。鬼。城。取。卷。不。云。城。を。取。不。及。六。乃。品。あり。第。一。小
國。守。乃。居。城。第。二。小。一。郡。或。之。本。郡。計。領。知。を。敦。士。大。將
乃。居。城。第。三。小。番。不。乃。城。第。四。小。柴。城。第。五。小。付。城。第。六
小。陣。城。あり。第。一。了。大。身。小。身。共。小。居。城。了。ハ。繁。昌。乃。地
を。所。要。不。用。由。急。一。其。繁。昌。乃。地。と云。及。北。高。く。南。低。く
南。北。へ。長。く。東。り。南。り。西。り。流。水。あり。と。海。あり。と。云
あり。と。云。小。堅。固。之。大。小。吉。地。あり。武。教。金。書。乃。説。金。河
内。國。千。早。城。之。楠。正。成。乃。繩。張。不。し。國。見。小。根。田。若
小。猫。路。小。赤。坂。五。乃。枝。城。を。築。之。藩。屏。と。お。せ。し。と云。里



千早城跡
 天王臺乃
 趾と云
 處了古松
 三株あり
 極めく
 大木あり
 奉丸二丸乃趾ふ
 礎石今なき
 橋乃跡もなき
 但天王臺を後人
 乃名付たり
 弁候臺あり



此れを
 旅券
 と云
 柵尾
 高の寺
 古物
 を
 孫と

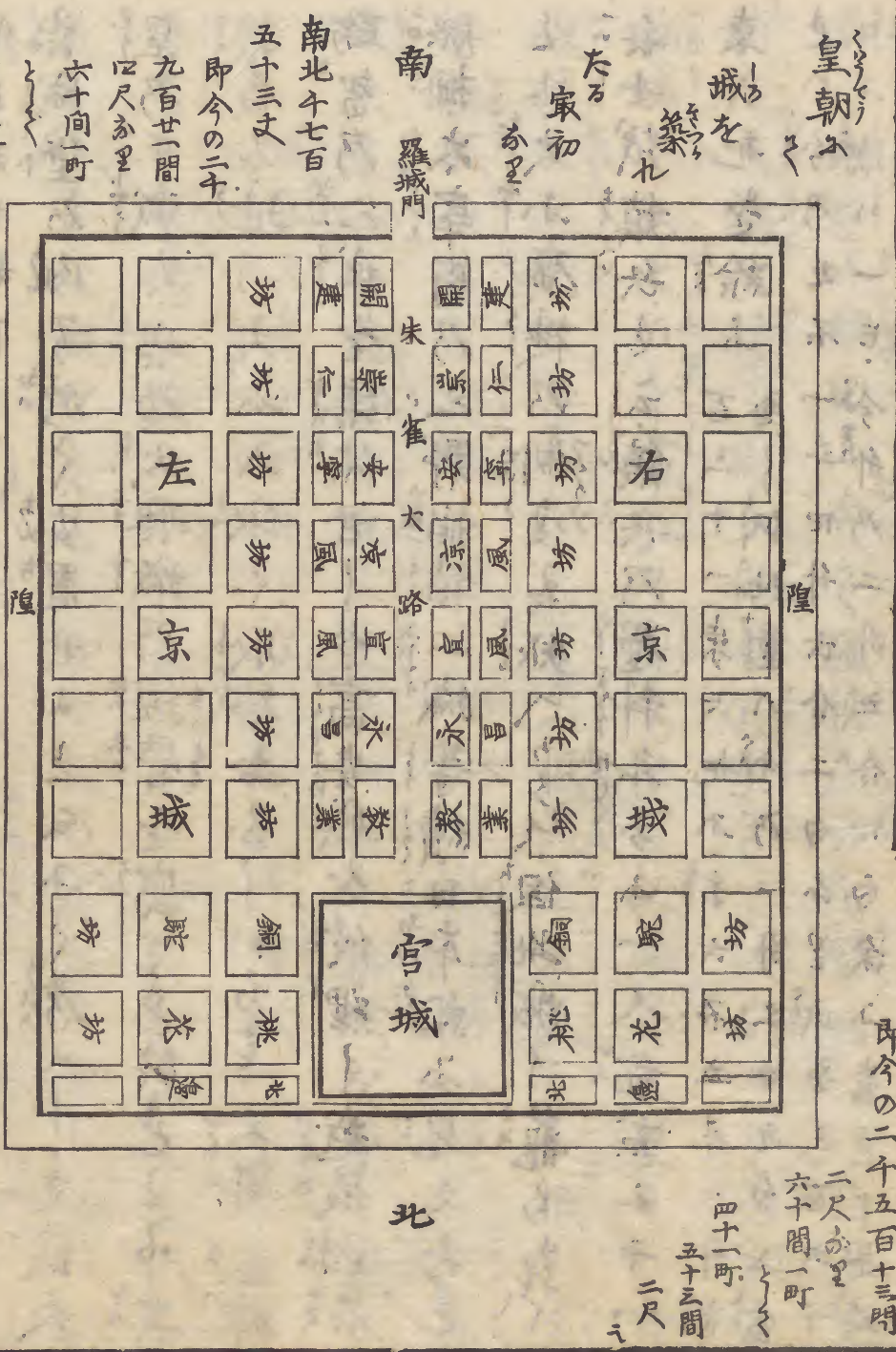
玉續
 ノ土

信亮云皇朝より城を築けり一征仁天皇五年上毛野
君乃遠祖八綱田命之狹穂彦王を撃つにけり。狹
穂彦王稲を積り城を修め其堅き一破るへり。以是を
稲城と云と日本書紀に見えり。又雄略天皇十四年
根使直を斬せむとせし根使直逃匿く日根に至
り稲城を造り待戦しと云。雄仁天皇五年より日
峻天皇二年物部守屋大連法河家稲城を築く戦ふ
と云。雄略天皇十四年より皇後小所謂城乃原始あり
唐書日本傳小國小城郭あり本を聯り柵落と云。以
あり然せば城を造り訓るを柵乃謂と云。築と云
作り義去りと云。代乃義あり人居代を云。苗を植
る苗代と云。

王續ノ上

官修る地を軍防令小東邊北邊西邊諸郡乃人居
皆城堡乃内り於之安置せよと云。考へ文武天
皇乃平城を唐乃大興城乃經營を寫りて決せし其
損益之地乃大小依り取捨ありからむ。大野基肄
鞠智乃之城を築治せし高安城を修理し。越後國石
船柵大宰府乃之野稻積二城等續日本紀不見也。是
と小大小廣穂乃制度を知へり。但此城を籠らむ
兵士城鎮兵と云。鎮兵乃糧料年分一人稻百二十一
束六把を給人。百二十一束六把。米六石五斗八升有
之。今乃九石一斗四升六合二分。米六石五斗八升有
日。不除ハ一日。今升乃二升五合四分。米六石五斗八升有
毎一人の由類聚國史八十日大同五年乃桑不見也。是
糧料あり。

大和國平城宮經營細圖



皇朝

城を築く

大初

南 羅城門

南北千七百五十三丈

即今の二千九百廿一間

四尺あり

六十間一町

四十八町 四千一間四尺あり

東西千五百八丈

即今の二千五百十三間

二尺あり

六十間一町

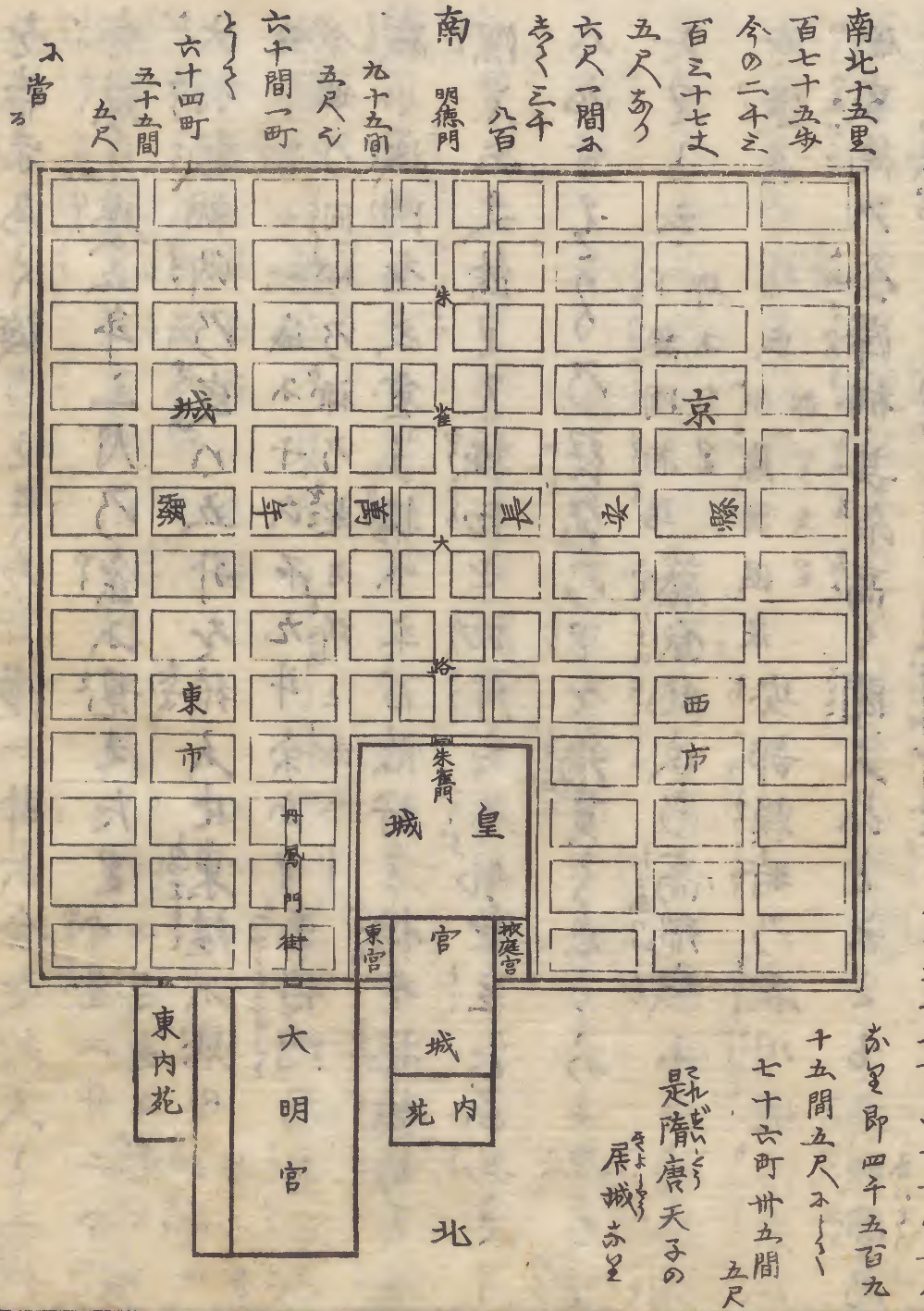
四十一町

五十三間

北

玉續一ノ十三

唐大興城經營細圖



南北十五里

百七十五步

今の二千三百三十七丈

五尺あり

六尺一間あり

南 明德門

九十五間

五尺あり

六十四町

五十五間

五尺

東西十八里百十五步

今の二千七百五十七丈五尺

六里即四千五百九十五間五尺あり

七十六町卅五間

五尺

是隋唐天子の屏城あり

大明宮

東内苑

を春米つるよねふく渡わたととる日糧いちりょう一升六合を給ふと三代
實録じゆりく元慶五年三月乃桑くわ不見みえた里た今量いまりやう二升二合に
大将だいしやう頼朝らんとしやう卿乃定さだハ五升を給人あた中東ちゆうとう鑑かん不見みえ也なり今量いまりやう四し
餘あま乃なり當あたる一歳いっさい不な十六じゅうろく石いし余あまあり平將門たいしやうもん乃島廣しまひろ公こう
今世いまよ乃同心なうしん乃なり祿ろく乃なり起おこる所ところと知しへし一いっ平將門たいしやうもん乃島廣しまひろ公こう
城じやうハ城門じやうもんを三重みへ了りやう構かまへ之これ百餘ひゃくじゆ所ところ了りやう槽さうを揚あ揚あ總堀そうくわ乃廣ひろ
深ふかさ三丈餘さんじやうじゆ了りやう掘くわ切き岸きし乃屏風びやうぶを立たたふ如ごとき了りやう
八九寸はちくわうすんをり乃なり鑿くわ乃甲かを鑄ちゆう貫くわんととる乃なり屏へいを塗ぬ
た里たと云い下総國相馬しもづのくにさるま藤原純友ふじわらのひとよ乃高繩城たかあひのじやう乃なり槽さう播は播は
を造つくせり云い伊豫國温泉いよのくにぬるま安部頼時あべのらんとし乃衣川えがわ柵さく清原武
衡ひらふら家衡けかへい乃金澤柵かねさわさく其その名な高たかく聞き人ひとと云いとと其その經けい管かん乃なり
法はふを講かう了りやうせ以もつ獨ひとり楠くすの氏うぢ乃金剛こんがう公こう父子ふし之これ世よ五十餘ごじゆじゆ年ねん乃なり

天續一ノ十四

間ま巖いわ松まつととる南なん山さん乃約東やくとうを爰こゝ守まも里り藩屏はんぺん鎮ちん接せつ乃雄ゆう
威いを示しさせり陳跡ちんせき亦また也なり晴幸はるゆき乃登覽とうらんととる城じやうを發はつ
明あせり七しち理り亦また也なり

光陰こういん箭や乃如ごとく晴幸はるゆき河内かふち了りやう留とどる既すでハ六年ろくにん楠家くすのけの舊蹟きゆうせき
盡つく歴覽れきらん今いまハ兼かねる乃幸京ゆききやう亦また也なり中ちゆう國こく乃往ゆき功こう名なを
立たてる策さくを亦また也なり乃なり往ゆき吉きち夫ふ王わう寺じ乃渡わた色しき橋はしを
打渡うちわた里り大物たいぶつ西宮さいみや兵庫ひんごの津つより船ふね乃乘のり安藝國あきのくに佐西させい郡ぐん嚴げん
島しま乃冬ふゆ宿しゆく乃なり柵さく守まも乃其そのを立たてる乃なり毛利家もうりけ乃仕つかえんえんとを
謀まる大永七年たいえいしちねんの秋あきと云い晴はる
柵守さくまもハ嚴島げんしま社家しゃけ供僧くわうそう内侍ないじ社役しゃやく人ひと職しやく乃上のり首くび一いっ負ふあり
舞方まいかたを兼司かねし里り往ゆき乃なり從したがひひ法はふ下した乃叙しよを本姓ほんせいハ佐伯さへい乃なり

苗字を豊後と呼けり何時乃頃より其職名を用ひく
ひく棚守と稱す大永の頃より棚守房致る時不當れ
永禄七年三月七日嚴島大願寺圓海上人建立棚守房
頭客人棚守親尊と云列名嚴島名所圖會不あるふ
考入へ

以時毛利元就行年三十一歳嚴島社冬乃次棚守の家
於く初く晴幸を見む其容貌を去く其氣を尋旦
其志趣を推問一暫く沉吟く城ありけり又七日
乃後使者を來らしめ棚守不告く先日一見せし所
の京都浪人よりけ地を去くむへく久後國中不經歷
せし先されと形く棚守其意をゆき晴幸不圖東の徳
乃威烈を語る晴幸即日暇を告ぐ立出んと以棚守之

玉後了十五

速かふを怪む晴幸云其代國不仕官を求んる為に來れ
り君より我を推舉せらぬ然も不君其不圖東乃徳
を給ふ君より意既不替也り圖東ハ還南か里か徳ふへ
と續し是某り暇を請所以形くと云棚守之乃敏捷を感
賞し止以贖か乃元就乃使者を言ひ不まくを告知以
晴幸厚く謝し棚守氏を辭し去

内夜修理亮昌豊云中ふ乃元就乃本領七百貫計あり
京都將軍家乃時百貫文不ハ米九百石を交易する年の
豊凶ノ依り損益あり共七百石乃米を収む不計の録
へ知八箇玉七ヶ玉ありは又ヶ玉持玉大内尼み
大友之太右と戦終不勝利を得三將乃玉を大友切
今安藝の毛利といひ我知あり昔の玉ハとて並

代為氏義貞より以後の件の元就が是と山本を鬼
か常ふ云川ふとあり。甲陽軍鑑甲陽古晴幸を引くと
安氣山赴る元就が仕んとて求る得ん然由元就の將
衆あふてを知らず是を諸將不稱賛し止ん能人の善
を顯すいと云へり。又元就の晴幸を奉る意を察ん
る不淮南子不吏將の必獨見獨知あり獨見とい人乃
見ざる処を見獨知とい人乃知ざる処を知ら云り如
し心中乃機意外の密をふり味を入る
山本勘助物無云安氣の元就敵國をさり隨へ千貫二
千貫を先方礼を召抱らんと云共普代の又千貫を
貫石士を執り上なるあけ覺あふ普代元入の意方の

忠功ふく國を伐治む各五玉をぬ知終を新集乃我
等式了澤山之下古系元御腹立を御道理子萬と云又
覺ゆかく甲斐あふ人を普代元あはは敬ひあ乃換
あふ人ゆ元就と云名將を頼む拉系入る執りらる
是非我等ゆ忠節を教り以來治る國乃先方元よあが
元ら教へると覺悟ゆて以りよつ元就乃威光次第ふ
増ると承及ぶ新集乃普代を漫る傍輩を漫る不非と
大將を輕んしを教道理ありとあり
山本道鬼陣法書ふ備を置く操掛る作法其備動く亂
たかを討ら為なる陣替乃作法乃如し是毛利元就
尼子經久と合戦乃時入止せし陣法あり信元云宋



史吳璘傳璘璘陣の法を之其法戦入と不長槍を以て前不居坐と起てを得と之乃次不最強弓を居其次不強弩を居膝を跪く俟其次了神臂弓と備を列ね備賊と相搏百歩乃内了至る時了神臂弓より發し七十歩不及入時了強弓強弩を並ひ放ち其次不拒馬不鐵鉤を連ねて戦ひ其傷を俟て是を更代鼓を以て節とあし其間不騎而旁を護る前を蔽退く是を豊陣の法と云とあり然ハ元就乃た之陣由は乃吳璘の法了依て發明せしかありや

嚴島を發し周防國吉敷郡山に於て至る大内從三位義興卿は之を求めたり義興卿を去大永六年三月

石見國不發向志く尼子經久之旗下乃城を去て六箇所進く那賀郡之隅城を圍ふ七月より十二月了及不松子不三隅兼隆入道糧盡く十二月八日降人子出尼子經久かくと及知と出雲伯耆備後美作數萬騎を討く富田を發し出雲國飯石郡赤穴陣しけふ頃之隅落城乃中成關進く那賀郡濱田了至る之隅と五十餘町を隔く對陣せ里合戦を敷と五十餘日了至る時山名右衛門督政豊伯耆國へ打出く尼子方乃城を嚴ふと聞えけは經久よ里使者を立て軍を旋く大永七年三月出雲國へ引退かりし後不石別大内家乃旗鼓不從ひけふ不義興卿新營乃所ありと周防國へ引返りぬとされぬ

謁者人亦あし。徒ふ月日を過せ内了。享禄元年十二月廿
日義興卿行年五十二歳ふし。薨去あり。嫡男義隆卿廿
二歳ふし。周防長門豊前筑後石見安藝備後七箇國乃
鎮藩とあふと云。共詩歌管絃了遊ひく百克乃卒。後か
るを志せ。六敗乃逆ひく衰し。やむ兵法調練。芸學を云者
進む了。終かく。やむ大内乃老長。陶兵庫頭持長入道道麒勇
を孟賁小懸智ハ子房ふ。ゆ若らぬ侍大將あせ。と。も自立
乃心あり。之國を憂ふ。家慮あをせ。の晴幸公。乃亂遠の
らしと思ひ。計里く此地を去。長門國豊東郡赤間關ふ。到
便航く。九列乃地了赴く。

とかき大名ふく。辰城を周防乃公。口と中可あふ。分
國を不及中。西國を殘ら。と在公。口仕大。家。中。承。及。小。熱
ハ。近代乃大内。教。生。出。よ。里。乃。大名。名。諸。氣。上。子。み。く。球
更。物。を。よ。書。内。典。外。典。味。から。以。款。を。詠。詩。を。作。里。乃
儀。正。く。志。く。上。下。を。常。ふ。着。し。初。よ。里。晚。ま。く。膝。中。緩。け
ゆ。ふ。作。法。ふ。定。里。何。事。も。皆。さ。せ。了。對。了。善。事。過。く。悪。く
罷。成。ふ。と。見。え。く。里。信。充。云。是。享。禄。乃。初。義。隆。卿。嚴。鎮。と
あ。里。了。頃。晴。幸。乃。現。見。の。家。周。防。公。口。の。風。俗。と。知。へ。了
爰。ふ。上。下。と。云。ふ。直。垂。乃。事。あ。里。成。氏。年。中。行。事。光。源。院
教。御。元。服。記。了。見。也。御。元。服。記。了。大。工。各。鳥。帽。子。上。下。を
正。下。あ。ら。ぬ。を。晴。幸。乃。言。を。熟。思。を。教。了。當。時。乃。武。士。平
知。へ。さ。形。里。

日上下を著せり。里一と聞けり。一宿夜務を日々乃
服とせし。あふ。一
豊後國を大友元馬頭義鑑累代鎮撫乃威を逞くと其國
と云と。一近年の火内家乃下風了。廉了。總了。一乃風俗
不從。一國あは別。一施さへ。一術。一あ。一去。一は。一關。一東。一立
越んと復船。一舟。一乘。一八。一重。一乃。一潮。一路。一了。一帆。一を。一揚。一く。一備。一前。一國。一見。一島
郡。一下。一津。一井。一乃。一浦。一より。一陸。一ふ。一上。一里。一の。一陰。一乃。一諸。一國。一を。一遊。一歴。一了。一丹。一波
國乃波多野内。一友。一の家。一客。一と。一々。一々。一乃。一不。一せ。一り。一合。一み。一子
を。一く。一た。一き。一の。一也。一と。一由。一心。一了。一叶。一入。一仕。一合。一也。一あ。一く。一柔。一狹。一路。一を。一徑。一々
北國を。一過。一出。一羽。一國。一の。一本。一郡。一金。一澤。一乃。一城。一蹟。一了。一上。一里。一後。一之。一年。一乃。一辛
苦。一を。一感。一了。一爰。一ふ。一七。一日。一七。一夜。一を。一過。一了。一け。一る。一と。一也

一本勘助物語云。伊豫守頼義朝長乃九年乃合戦八
幡本郎義家朝長乃二年乃軍を其身其國乃守と一々
其部内不服乃者を征伐せし。あ。一里。一善。一夫。一乃。一下。一王。一長。一不。一非
と云と。一あ。一然。一ふ。一九。一年。一之。一年。一乃。一久。一し。一を。一短。一大。一不。一武。一威
乃薄き。一不。一似。一と。一也。一と。一も。一實。一ハ。一然。一ら。一以。一王。一威。一猶。一盛。一あ。一ふ。一に。一推。一系。一子
將軍乃推勢輕く。一々。一賞。一罰。一を。一專。一ふ。一と。一教。一を。一得。一と。一也。一は
那。一里。一右。一丈。一將。一頼。一朝。一卿。一を。一知。一了。一召。一は。一是。一は。一平。一家。一追。一討。一乃
宣旨到來。一あ。一里。一け。一不。一時。一了。一軍。一乃。一習。一ハ。一賞。一罰。一を。一大。一將。一乃。一司。一ふ
處。一あ。一里。一進。一退。一と。一由。一了。一御。一任。一あ。一ふ。一へ。一々。一申。一傳。一せ。一玉。一ひ。一た。一り。一し
不。一依。一義。一仲。一追。一討。一平。一家。一退。一治。一六。一年。一ふ。一々。一金。一々。一天。一下。一を。一治。一ふ。一へ。一里
頼。一朝。一と。一頼。一義。一義。一家。一乃。一優。一劣。一あ。一ふ。一了。一あ。一以。一王。一威。一武。一威。一と。一由。一不

一致せしむ故あり信元云金澤乃柵を清原武衡家衡乃
籠里之義家朝長と云年之際合戦ありけり舊蹟あり
是を後二年乃軍と云 此軍を飛騨守惟久畫ふハ土
將保脩世尊寺從之位 御門文殿寄人仲直持明院亮
文八貞和二年法印推大僧都却惠不三卷あり
謝也か里結ハ天保十四年より此軍を繪了書けり
後醍醐天皇南入巡將乃後大將を立らんと其罷了
當らゆふら故に征伐途を失ひ勇將猛士も功を立た
を得さふを諷諫せんためふ作也ふ形也と云但其繪
乃精妙を賞する人乃多の里了晴幸此地了至
以歎をかき其軍機了於了意を盡せ里と云へり
金澤乃柵を出り秋田郡白澤より磯岡を越り陸奥國乃

玉續一ノ廿一

津輕了入り岩城ふを詠め南部磐平乃境より鎮守府乃
蹟を過夜川を渡り鎮守府將軍秀衡乃中尊寺光堂を
巡禮し此國了住りやと思はるる伊達左京大夫植宗と嫡子
晴宗と父子矛盾し國由穩るるから以て停る處を便り無
也は白川乃関をへり下野國那須野を分大膳大夫資房
乃許ふ至里了資房白河乃結城 白河乃結城と云ハ上
尉孫廣乃左兵衛佐と合戦し陸奥方より東不浪人を
嫌ひ去るは足留る術あり常陸國乃佐竹を關東乃名
家ありあせり後ちやと志し那須乃御嶽を打越久慈乃
郡ふ赴けり左少將義舜朝長とく率し大膳大夫義篤
家を襲と云と由齋僅ふ廿二三歳より萬老長乃沙汰

色ハ晴幸仕進乃路去ク、依竹を立ク、真壁郡下妻小至里
多賀谷修理大工政經下妻に即ち幹去、多賀谷氏乃一類を里
跡了、小山朝政乃子、長朝を居、其後、多賀谷三郎老義
を以テ下妻乃城主とシ、老義六代乃孫、重政乃子、政經を
を以テ古河乃御所不仕人トを請中せり。此時、左馬頭
政氏朝長政氏朝長乃長朝と、左兵衛督高基朝長と御中睦ららば
おし、世は新冬乃便を失ひ、ゆらば上杉家了仕官せとやと
上野國緑野郡平井了赴きけり。憲政家督乃初といひ
年漸六六歳憲政ハ大永四十年お世は内外乃政務家老の
大石武藏國七黨武藏國七黨ハ小川太郎宗弘乃長子、弘真を
道也、武藏二官城了住、源左衛門尉ハ小幡七黨の兒玉
平六郎行賴乃後お里長尾長尾お里、小幡後乃長尾お里
口即行高乃長子、小幡長尾お里、小幡總社乃家の
平六郎行賴乃後お里長尾長尾お里、小幡後乃長尾お里

玉續一ノ廿二

白倉秩父平武者行乃五男、おと、威を争ひ、面々乃
居城了、引籠り、平井不去、屋を侍由居合、以晴幸のく、
上杉乃城と遠く、以と思ひ、けさは更了、旅装去、小田原
を過、小條家乃制度を窺ひ、箱根を越、駿河國小至里、
小當國府中乃今川義元朝長を、今川に即國氏六代乃孫
上総介範政朝長乃曾孫、治部大輔氏親朝長乃三男、
母右中御門權大納言宣胤卿乃息女を、將軍連枝の貴
族と云、海道第一乃酋長お里、此家了仕、之、年、末乃本意
を遂、之、推奨の縁を求と云と、然る、趣、之、知、己、由、無
終、不、乃、と、お、
乃地頭牛窪弥六郎と云者あり、其身、之、分限乃者、不、

あつ孫と也頗人を知乃量ありけは晴幸の志を憐せ之
あをを扶持しり牛久保の東海道御油宿より北東へ入
今田今田とあふ牛久保今田今川今田然ふ晴幸諸國を遍歴し
て古城跡を圖し古戰場を覽く勝敗の機を察知し人数
積兵糧割し精し甲斐信濃乃國々述ゆ之也
郡内乃小山回備中守あをを武田勝子代九了語る勝子代九
心中大ふ喜ひ小山回を召具し竊り晴幸の家を訪る
是より行軍治城乃軍機を語らひ主従乃約をかす是
より衣食を饋く謀主とあひ實天文三年十二月より
勝子代九十四歳晴幸に十二歳乃時あり

甲斐國山梨郡躑躅崎乃城今古府中と云武田刑部大
輔信綱朝臣娘く衣和館を

後築て爰居し信虎晴信より信濃國伊奈郡浪合
勝頼と四代相續住せし船里
を過冬河國設樂郡坂場乃村に掛り新城本野原を
經く牛窪に至る此路凡四十里了餘れ里尾顔嶮牛
馬を通せゆ敷地もあり勝子代九十四歳乃幼稚殊了
單身輕裝人乃犂動了依ふあふ昔蜀乃昭烈皇帝劉
諸葛亮を嘗中ふ之顧せしと事相似く也と昭烈皇帝備
四十七歳諸葛亮廿七歳乃時漢乃建安十二年あり曰
ふし新野に屯し賢を懐ふ一切あを勝子代九了
無事乃時軍師を求免らせし比也其差行を霄
壤乃さらんや

晴幸武田元京之更信虎朝臣明應二年甲寅誕生天
文三年の四十一歳梟雄暴

辰乃世... 武田... 遠江守... 義成... 孫... 某乃孫... 等乃一族... 葛尾... 乃腹を割... 是を手... 内... 其過を救... 威武を張... 以將士薄...

玉續一ノ廿五

あるを廢... 新羅... 不見... 思ひ... 大... 冷川... 露言抄... 歳... 門尉... 重器... と勢を過...

五片腹痛久思失まんかろく斯味氣か老乃僻耳
を備付る形里と云ふ依ハ義元朝臣弱教より文事ハ
心を寄めハ一知魚

晴幸朝比奈兵衛大を以て孫兵乃兵法城取陣取不鍛
練一京流乃劍術上平か分由城今川義元朝臣へ申す仕宦
を望と云と中義元朝臣年若きより上了軍旅乃法を累代
乃庭訓了後事定へ何事新く異邦乃兵法を學
へんや之乃上晴幸勢短く色黒く眼ハ小く趁波か里然
中列牛窪乃小身より出下部一人も召仕かぬ程乃者
乃如何か是ハ軍旅了通達せん城一川預里中世以一隊
の人数を中引廻さく何とく城取陣取を及鍛練せん

三劍術ハ神道流不増るがあらく所く賞玩ハ無里
乃色は逆習扈從ハ輕蔑く隨ハ者ハありと云

武藝ハ傳ハ山幸勘助晴幸入道道鬼ハ京流刀術了
世京流ハ堀川鬼一法眼流か里とあり

あり其傳流鬼一法眼ハ歸一法眼了作ハ山城國愛
を去らハ

岩郡二瀬村権取社乃左半所許ハ歸一法眼乃墓あり

九郎判官義經乃兵術乃師カ里と云

人カ里源義經ハ鬼一法眼通一了潜了訓閱集を傳
里と云此書鞍馬法所頼上里清尊明範性慶隆光慶
重宿通代慶義延宿道鬼ハ相傳せハ由云神道流
云々下総國香取郡飯篠村乃人山城守家直康島香取
乃神ハ祈く刀槍乃術精妙を得天真心傳神道流と稱

是其流廻なり

信虎朝臣乃暴虐日々増長し長子勝子代丸を怯弱お里
とてあをを廢廢子乃次郎丸後左馬分を立く嫡子總
領とせん之謀らせけし由駿府へ聞えけし晴幸火不
驚り父子乃間去尋常乃理み争ひ難し如何し信虎朝
臣横紙破り若本性お里と申勅後之云よも若五人後
去はより勝子代丸乃元服乃儀を謀らぬし晴幸竊
不上京し大外記康顯朝長了就く宣旨を申し又上野中
務少輔了依く室所將軍義晴卿時乃御一字を請け
ふふ累代乃名家おは容易く御字を出さぬと斟酌
中野川邊と申晴幸の申餘儀あり若此御字ふ

手續ノ廿七

愛く文乃荒涼お忍心静まり形は好御方人お忍し
然らば上野中務少輔將軍家乃御使としく下向し
宣らせけし天文八年正月十七日勝子代丸を源晴信と
改らせ即日從入位下大膳大夫小補任せら給く宣旨をば
大外記康顯朝長あは城調覽箱了入く是を持上卿長轉
法輪三条權大納言公賴卿お里外記家譜歴名土代たるふ
障もかこあ里く下向二月下旬不及ひ三月朔日宣旨
御使將軍乃使節を信虎朝長若居城へ迎へ元服乃式を遂
行し之郷應善美を盡し古籠屋小路新寺を以て御使出の
旅宿とし栗原蓮西入道
信亮云武田信義右大將賴朝卿と共に朝敵を討太平

を致せし勲功大なるを以て六孫王八代乃嫡孫と云
を以て頼朝卿最敬禮を盡し是の由は其子孫不承
小家禮の儀深り抱き以て家切の儀武王と云義成王
乃列不入らば去は鎌倉九代乃將軍家小字を授
五人と家一列北條一家を放てや信義七代孫陸奥
守信武朝長より尊氏將軍了重く崇敬せらば由は
かは即鎌倉將軍乃時乃如く一字乃沙汰了及らば以
信武朝長より信虎朝長より八代乃際も應く先蹤不
從く御字を中とふか皇法了晴信朝長了至る初
將軍家禮乃列と同く御字を中とせしむ晴幸乃計
策不出く父子不訣を恨れせんと乃誠意おせし信

手續ノ廿八

虎朝長乃意了満ち敬禮ありしにそれと由宣旨乃御
使武家乃專使他了比例おきを面目と成り入らば
晴幸の此籌策西大衛乃列呼く國を以奪ひ是と由民を
和せると能く如何せしやと不措り向く多し不措り
云く王了觀るあそ物るへは是と謀りし不似く意を違
異お敷みや乃怨に身
然る信虎朝長次郎丸を寵愛せらば一と次第不厚く晴
信朝長を疎ま敷く一と舊時了倍く多敷くより虎山伊豆守
信行甘利備前守小田備中守板垣駿河守信成飯富兵
部少輔虎昌等打寄り評議去けあやう信虎朝長かやう
と荒き一と乃被成は國民暫時に安堵せし馬場山縣

内儀之儀等乃老將の謀り死し其外は乃輩の由縁を求
る他國より是の老く行歩乃叶をぬ輩幼稚く東西知ぬ
者とも共々表人とあそ敷くあせかくくの鄰國乃敵等其
とき誰を催候し七大事乃軍了の事を合せへり然らば武
回乃家乃浮沈旦夕了通れ急忽あせへり時了あふ急
駿河乃今川教と相謀り信虎朝長を推籠糸らを晴信朝
長を家督了居んと隠り謀りあせを晴信朝長あせ
かば密り晴幸乃許へけ事如何せへりと宣ひ遣へりれ
尚書云后克乃后たあを艱とせ色の臣克廠長たあ哉
艱と以とかや晴信朝長少あよ里心を軍國不用ひ能將帥
乃氣を察り峻峻乃遠路哉跋渉あく良智良能を靡

治國安民を以て艱とせ教り故り老長く廢立乃艱
を謀教直哉説文り君を尊あ里長を牽あ里心常あ君
小事りあ里と云へ孟子云貴戚乃親あ君過あ色及位
を易と云里元山甘利小山田板垣飯富を一族あ里大
長あ里所謂社稷乃長あ里社稷乃長あ君急と云長
張るあ色を相君廢ると云及長掃く是を更と云里然
是は信虎朝長軍國乃務あ急里將帥乃機を廢せ里大
長乃為り追せり自取里と云へ
晴幸庵原朝比奈等乃諸將帥了甲斐國乃政散民離んと
せあ上城詰里是を輔く外援と為へりと云へ庵原いかり
あく是を輔へりせと云晴幸答り援信虎朝長惟祖亂あ

志く多く無罪者を殺し諫長を虐し孕婦を割親族を滅
と國民怨恨士卒憤懣里怨と憤里と多し積りおはは缺
蕭牆乃近き處了起かへ若又天神武回家を愛之地獄甲
斐國人を憐之玉を宿老乃將帥かあら以信虎朝長を推籠
く子息乃賢者を擇く家督と定むへ其時當屋敷朝長
信虎朝長乃婿君よりまとは御口入ありて甲斐乃存
眷弟乃公を仕居らばおは甲斐信濃上野と乃御先と思
食へし是戦とて勝争より多く取乃謀めて以と理を盡
志道を別く申けは例乃勘介の細水練理兵法よと笑者
乃多くし信と教人々稀おはとそ一先換りしと有
當家乃幸福是不過しと待幸と教人中ふ有けしとせ

